あいまいな言葉「ファジー」

西山　豊（大阪）

1

最近はやたらとファジーという言葉がはやっている。ファジー洗濯機などの電化製品。ファジーな政治，経済。今年のバレンタインデーもファジーチョコというのがはやった。これは，本命チョコと義理チョコのあいだをねらったものらしい。贈るほうも，贈られるほうも気兼ねをせずに済むわけだ。

もともとファジーという言葉はコンピュータに由来する。コンピュータは0と1の離散の世界である。YESかNOか，all or nothing ではあまりにも極端だ。アンケートにしても「はい」と「いいえ」以外にも「わからない」や「無回答」や「答えたくない」などいろいろある。コンピュータをもう少し人間らしくしようという試みである。

でも，これは少し誤解がある。コンピュータは確かに0と1の2進法で作られている。これを2値理論とよんでいる。創世期のころは，10進法のほうがなじみやすいので，10値理論をもとにしたパラメトロン計算機というのも試作されたらしい。現在のコンピュータの素子は確かに0と1しかないが，プログラムは，いかようにでも作成できる。ところが，世間にはなかなか分かってもらえない。コンピュータ屋は「ほどほど」ということを理解しないと。

2

この中間をねらった融通のきくコンピュータが必要ではないかということで，ファジー理論が生まれた。こういう考え方は，昔からあった。1950年代は人工知能という言葉で登場し，まるビルの大きさのコンピュータができればいずれコンピュータは人間にとってかわるといわれた。でも，人間にとってかわらなかった。その後，AI（Artificial Intelligence，人工知能のたんなる英訳）だとかエキスパートシステムだとか，ニューロ・コンピュータだとか，第5世代コンピュータだとか第6世代コンピュータだとかいろいろな言葉で登場する。ファジー・コンピュータもそのひとつ。結局中身はからっぽ。たんなる，お色直しだ。

こんな本当のこと言うとメーカーはきっと怒るだろうな。でも私，14年間IBMに在職していました。いつも矛盾を感じていました。国民をほんろうするのは罪なことだと。私に言わせれば，しょせんコンピュータは人間が作った道具である。コンピュータが人間に取ってかわるなんてことは永遠にありえない。コンピュータ屋が言っているのだから間違いないだろう。

これだけ技術が進んだといいながら，虫一匹さえつくれないではないか。生命の謎は永遠に不滅だ。なぜ，コンピュータが人間の頭脳を越えられないのか。それは，「自分の頭のことを，自分の頭で考えなければならない」という大いなる矛盾があるからだ。

文部省の学習指導要領にコンピュータが入ってきても，けっして恐しがる必要はない。たぶん，得意がる教師と，拒絶反応を示す教師に二極分解すると思う。少し距離をおいてコンピュータをながめ，ひやかし半分でつきあうとよい。コンピュータで悩めば，いつでも相談ください。

3

最近の流行語はファジーであるので，期末試験にこれを出題した。選択肢の中から選べということで，「あいまいな」の意味であるという項目にほとんどの学生が解答した。これで一応よかったのだが，受講生のなかに一人，中国の留学生がいた。中国人は漢字の文化圏であるので，ひらがなに弱い。朝鮮のハングル文字のようなものだという。辞書を一生懸命引きながら考えている。

試験が終わって，留学生が教壇に来た。「『あいまいな』の意味がわからない」という。漢字ならわかるだろうと思って，うろ覚えの，「あいまいもこ」の「曖昧」という漢字を書いてやった。留学生は少しためらいながら「これは，中国では，男女関係の～」と顔を赤らめて答えた。何のことを言っているのかなと思って，研究室にもどり国語辞典で「あいまい」の意味を調べてみた。

その中に「曖昧屋」という応用例があった。「表向きは料理屋，宿屋に見えながら実は×××を置いている，いかがわしい稼業の家」とあった。これで，顔を赤らめた意味がわかった。年配の教員にたずねてみると「終戦後，曖昧屋というのもありましたな」とのことだった。英語の「Fuzzy」が，日本語の「あいまい」に，そして中国語の「曖昧」になると，意味がおかしくなるのだ。3つの文化圏を通過するのだから。国際化の時代，これからは日本語中心の考えは改めねばならない。それぞれの国にはそれぞれの文化や言葉や歴史がある。それをお互いに理解しあってこそ真の国際化だ。

言葉って意外とあいまいなものだなと思った。それを知らずに我々が使っているのも実にあいまいなものである。

（大阪経済大学）